第9期第3回神戸市立図書館協議会議事要旨

日　時：2026年2月20日（金）　15時～16時30分
場　所：神戸市立中央図書館2号館4階　研究室（1）（2）
出席者：(委　員)原田会長、尾野委員、小野委員、常泰委員、福田委員
　　オンライン参加：齊藤副会長、柏木委員、安若委員、合田委員
　　(事務局)中央図書館長、総務課長、総務課担当課長、総務課担当係長5名、
　　利用サービス課担当係長1名、総務課担当1名、利用サービス課担当1名
傍聴者：　3名

議事次第

1　開会
　第9期第3回にあたって

2　報告
　（1）令和8年度事業計画（案）
　（2）電子書籍の充実
　（3）神戸「本」の文化振興プロジェクト　取り組み状況
　（4）新垂水図書館オープン
　（5）新館の整備状況
　（6）中央図書館1階エントランス改修

3　閉会

議事要旨

1開会

前回少し触れた生成AIに関する話題が大きく注目されている。図書館との関わり、とりわけレファレンスがどうなるのかという点で、図書館学会等でさまざまな実験が行われている。前回は「生成AIはまだ図書館に代わるまでに至ってない」と話したが、直近12・1月の実験結果を見ると状況が変わってきている。具体例として、国立国会図書館が集めているレファレンス共同データベースから150件の質問を抽出し、生成AI（GeminiとChatGPTの合点に）に回答させた。レファレンス共同データベースそのものを検索しないという条件でも、約7割程度の正答に近い成果を出しつつあるという結果が得られた。これが図書館のレファレンスに直接役立つかという点では、必ずしもそう単純ではないといわれている。こうした状況下では、図書館に持ち込まれる質問の質そのものが変わる。つまり、利用者はまず生成AIに質問し、その上でなお分からないもの、あるいは

AI の回答に満足できないものを図書館に持ち込むようになり、レファレンスそのものが変化する。図書館サービスが大きく変わっていく可能性がある。このように、図書館の使い方、役割、期待が変わる節目・時期に来ているのではないか。協議会としての各種報告や事業計画がどう実現され、どう作られるかによって、将来の神戸市民がどれだけ有効に楽しんで図書館を使えるかが決まってくる。活発な意見・指摘をいただき、協議会として提言を行い、図書館運営に生かしていきたい。ぜひご意見をお願いしたい。

2　報告

事務局より報告。

報告事項（1）令和 8 年度事業計画（案）（資料 3）

・令和８年度事業計画（案）について報告。

報告事項（2）電子書籍の充実（資料 4）

・電子書籍の充実について報告。

報告事項（3）「神戸「本」の文化振興プロジェクト　取り組み状況」（資料 5）

・神戸「本」の文化振興プロジェクト　取り組み状況について報告。

報告事項（4）新垂水図書館オープン（資料 6）

・新垂水図書館オープンについて報告。

報告事項（5）新館の整備状況（資料 7）

・新館整備状況について報告。

報告事項（6）中央図書館エントランス改修（資料 8）

・中央図書館エントランス改修について報告。

【報告事項に関する質疑応答】

（会長）　会場・オンライン双方から自由に発言をお願いしたい。

資料 4 の電子書籍サービスに関して質問。電子書籍について「小学校 700 回」「中学校 13 回」という 1 日の平均閲覧数が示されているが、図書館としての評価はどうか。十分利用があると考えるのか、11 万人を対象とした場合に少ないと考えるのか、また利用の推移をどう読むか見解を伺いたい。

もう 1 点、読み放題パックを 7 から 13 に増やす件について、増やし方（選定基準・決定プロセス）を説明いただきたい。

（事務局）　平均の閲覧数について、図書館として多いとは認識していない。来年度は利用回数増に向けたアプローチ強化が課題である。

中学校での利用が特に少ない。2 月以降の読み放題パック数検討時に、学校教員から意見聴取し、生徒が利用しやすい方法を検討したい。

読み放題パック数増については現時点は想定段階で、7 から 13 に増やすこと

は確定ではない。2月に提供可能な読み放題パック種別がでるので、それを踏まえ学校園と協議する。授業利用を主軸にすれば利用数が伸びると考えるので、自由読書に加え、授業での活用方法も含め検討する。

（委員）　1日平均700回閲覧が多いか少ないかは判断が難しいが、280冊に対して700回というのは紙の本では実現しにくく、多い値とも感じる。特に青い鳥文庫などの利用が想像されるが、紙の本との比較や利用の仕方の違いなどデータ取得はあるか。

（事務局）　現状、そこまでの詳細データ取得はできていない。どのようなデータが必要かを精査することもこれからの課題。

（委員）　他館の状況でも電子書籍の利用は一般に少ないと言われる。一方で、青い鳥文庫の様な同時接続数の制約よりも、調べ学習向け資料の比率が高いから利用が伸びにくいという指摘もある。単純に数を出して終わりではなく、小中学生を対象にしたサポートを神戸市立図書館がどう考えていくのかという方針と合わせた分析が必要。

（委員）　現状、電子書籍について学校もアピールが少ないと自覚しており、これから閲覧数の増加の余地ありと考える。教育委員会がGIGAでの学習推進に伴い、雨天時や給食後など以前は読書していた時間に、児童生徒のタイピング練習などの端末利用が増加している。業務改善で授業時間数が減り、朝の読書（朝読書）もカットする学校が増加し、学校で本を手に取る時間（隙間読書）が減っていることが学校でも話題となっている。

実践研修図書館グループの会長として、来年度は隙間時間に子供達にどう本を手に取らせるかを推進し、GIGAとの関わりでタイピング練習よりも、本を押していきたいと検討している。電子書籍の推進も一緒に取り組んでいきたい。学校での具体的な利用としては、高学年は「日本の歴史」等、低学年は絵本の利用がある。教員の声としては、1年生で必ず使う「動物の赤ちゃん」「海のかくれんぼ」等のシリーズが電子で入っていれば、現在各校で行っているスキャン→配布→閲覧・消去の作業が不要になり、全校的に利用が広がる可能性が高い。

（委員）　現場での利用の話は有用である。市立図書館としての関わり方を別途検討する必要はあるが、まずブースターとして電子書籍の存在の影響は大きい。700冊は11万人対比では小さく見えるが、数百冊の電子本が出回って読まれる現象は面白い。一方、電子が「売れすぎる」場合の書店への影響も留意が必要。

（委員）　現段階では「効果」をどう見るのかは、まず効果の指標整備が優先される。

9月スタートで1年経過していない中、1日700回閲覧を多いと判断してよいと思う。量の問題だけでなく、何が・どこで・いつ読まれているかの種別分けが必要だ。絵本を一冊読むことで1回なのか、調べ学習で1ページ閲覧が1回なのか。それを用いて勉強ができたのか、授業内か放課後か、学校の隙間時間か家庭か。もう少し細かく検討していくと電子書籍の意義について、学習活動・

生涯学習・子供への効果など多面的視点が可能になる。現時点で結論は出さず、今後の課題として検討材料とするべきではないか。

（委員）　電子書籍と紙の本の買い分けが必要になる可能性がある。小中学生は電子比重が高まる一方、予算が限られているため紙の本を減らす事もあり得る。その際に「何を減らすか」の判断材料となるデータ整理が重要である。システムで取得可能なデータ項目（IP/端末単位、学校単位、読まれる時間帯など）を確認の上、館内で専門家も交えて分析を実施し、さらに図書館がどのように展開していくかを検討する詳細データを収集して欲しい。

（委員）　読み放題パック全体が小学生向けに寄っている印象がある。青空文庫はあるが古く・難しい作品も多い。私立立中学校 3 校が手を挙げている実情もあるので、中学生向けコンテンツを強化すべきではないか。

（委員）　青空文庫は著作権許可のとれたもの以外は 1969 年以前の物となっており、古典が多いのは事実。次回または次々回の協議会で、「何があり、何を選んだか」・「どう利用されたか」・「図書館の分析」などを簡単に説明して欲しい。

（委員）　最終的にどの方向へ持っていきたいのか。学校では「使わなければいけない」という前提がある。最終的に子供の読書をどう進めたいかの方針が見えにくい。調べものでは中学生は本を使わずネットで調べる時代なので、どうやったら子供たちに何を利用させたいか方向性が見えると分かりやすい。現段階はまずは拾いたいという作戦でよいと考える。

（事務局）　書店が減少している事や、子供の読書離れも進んでいる中で、紙の本や電子書籍など色々な選択肢を設け、その中で子供が本を読む環境づくりを提供したい。その先は、先生方がおっしゃったことも含め、分析しながら決めていく必要があり、今後検討したい

（委員）　本をよく読む子は紙の本を読んでいる。著作権の問題もあり電子化が難しいことも一因。今はまだパソコンに慣れる時期で、強力な電子化推進は無理がある。子供には保守的な面があり、最初の出会いは母子のための赤ちゃん絵本の時期。紙から入り、小学校で初めて電子へというケースが多い。統計ではなく、じっくり見るのが大事だと思う。強制するのではなく、紙でも電子でもどちらでもよいというのが子供にとっては大事だ。ラインナップの充実は将来的に必要だが、まず市場に出回り手に入れやすいものを図書館が採用することが重要。図書館は、子供たちが日常的に自分で選んで『できる』環境を作る。物語や調べものの本の利用に繋がり、紙と電子どちらも使える子供に育って欲しいので、そういう流れで図書館は居て欲しい。現状はそういう流れなので安心している。子供たちは一旦手を付けると習得は早いので、数で早急に評価するのは控えて欲しい。

（委員）　280 冊の本で 1 日に 700 回というのは紙の本では難しいというのは間違いなく、電子書籍を入れる事によって借りられている。紙の本を読む量が減ってい

るのかは不明。子供にとってそれが良いかどうかは数と別に分析すべきで、方針も含めて考えて欲しい。数だけではなく、どう動くかを図書館に考えて欲しい。

（委員）　基本的な利用数（アクセス数）は曖昧。紙でも同様に『パッとアクセスして読まない』はある。そこを押さえた調査をして欲しい。学校でブックトークをすると 30 人クラスで手に取るのは 5 人弱、最後まで読むのは 1～2 人という現実。それでもよいと伝え、最後まで読まなかった子は軽い挫折感を持つが、今は読めなくてもこんな本があると知ることが大事だと伝えている。読めなかった悔しさがどこかで読むことにつながる。自分自身も子供の時は本を読める子ではなかったが、そういう道筋をたどって読めるようになった。子供の読書活動に関わっている大人の関わりの共通点は『強制しない』『個々のゆっくりした道筋を認める』こと。読書の自由を体感することが重要。推進するエネルギーと長い目で見ることの両立は難しいが、子供を育てるとはその両立だと思う。ぜひ大事にして欲しい視点。

（委員）　読書活動の推進は単に数の把握だけではないというのはその通りだ。時間も限られるので、読書推進・本の文化振興（資料 5）に移る。前回も活動の話があり、書店連携がユニークで面白い。日本の出版社は一時期 5,000 社弱あったが、4,000 社を切り随分減っている中で、出版社の協力を得てというのは有効で、書店がなくなっている自治体もある中で活動を広げるのは有効だ。図書館と書店の連携は重要。SNS は増やすのは難しいが、イベント関係は面白い。みんなの本屋講座の受講者 150 人は、想定がどうだったか。100 人の枠が 150 人なのか、300 人のところが 150 人か。

（事務局）　開始前は 30 人くらいの想定だったが、開催前時点で 100 人を超え、開催中も増えて最終的に支払い済みが 150 人。

（会長）　有名な方が講師で来られていることに驚きがある。こうした活動について、頑張っていただきたいのはもちろん、プラスアルファや別の観点の意見をいただきたい。

（委員）　書店と企業との連携企画はユニークで面白い。今回の取り組みの効果・反響はどうか。販売グッズでよく売れたものなどの声はあるか。

（事務局）　協力企業・書店に企画終了後アンケートを実施した。ほとんどが好意的で、次回もやりたい、高額商品のブックポシェットも売れたとの声がある一方、書籍販売は伸びなかった店もあれば、よく売れた店もあり差があった。書店講座に関連し、東京で活動する森本萌乃さんのリアル店舗に、講座受講者が来店するなどの反響があった。東京の書店業界でも『神戸が頑張っている』との話が伝わっている。神戸市の地域限定の取り組みだが、日本各地に影響が広がっている状況。

（委員）　心強い反響だ。ポイントは、本に普段接点がない人、本から離れている人への

アプローチ。子供・大人とも、本好きにアピールするのは比較的容易だが、本屋や図書館に行かない人に本に触れる機会・きっかけをどう作るかの取り組みを読書推進の新しい工夫の中に入れて欲しい。

（委員）　ブックポシェットは4,000円と高いが売れているのはすごい。コーヒーや紅茶などの販売もある。

（委員）　出版業界では本の価格が安すぎるという声がある。物価が上がる中、書店の取り分が薄いことが問題。本の価格を上げられるのは出版社のみで、再販商品であるため難しさがある。販売グッズは安いものも高いものもあるが、比較すると本は安い印象がある。

（委員）　日本の本は特に安いと言われるが、制度が違うので世界で比較するのは難しいが、違うものと結びつける活動はユニークで面白い。受講者150人でペイできるのか。イベントは継続性が重要で、一回で終わるのはつまらない。どうやって継続できるか。参加費5,000円で150人来場。東京からの登壇者も多く呼んでいるので、全部賄うのは難しいかもしれないが、ある程度、こういうものが続けられる環境が整うといいなと思う。

（事務局）　webなので、旅費はかからない。来年度は、引き続きアーカイブがあるので、聞けるようにと考えている。

（委員）　参加者もどちらもwebか？

（事務局）　はい。

（委員）　全部アーカイブにすればいいのか。

（事務局）　はい。基本web上でライブで実施し、ライブを見られなかった人に後程アーカイブでご覧いただいた。

（委員）　書店開業に向けた相談会というのが気になるが、これは何をするのか。

（事務局）　web開催だが、実際その場で質問を受けない形式で、講師が一方的に喋る形式で開催した。熱心な方は全部を、またピンポイントで見た方もおり、受講することで質問が湧いてきたと思うので、それを放置せず、書店開業のための実力、知識、ノウハウにしていただきたいので、少し密に対面でお話を聞き、つなぐべき先につないだり、教えたり等も含め開催をしたい。

（事務局）　来年度は具体的に個別の相談会の様な事ができたらというイメージだ。

（委員）　実際に相談会などを開催する時は、対面でないとしんどい気がする。札幌の図書情報館などは、専門家の方が図書館に何月何日来られるというものがあり、その時に来てくださいと案内されている。同じように神戸市でも、相談会を1日設定できれば、書店開業を目指す方に来てもらえるかもしれない。
図書館はどこに存在意義、もしくはどう関わっているのか。イベントそのものを開くこと自体は非常に有効で面白いが、図書館が見えないので教えて欲しい。

（事務局）　書店開業ということで言えば、会長がおっしゃる通りだが、元々は神戸「本」

の文化振興で、身近に本がある町を目指している。町から本屋がなくなっているという現状をどう捉えるか、どう挑戦していくかという話だ。書店を少しでも増やしたいので、「本の文化振興」を図書館が引き受けた段階で、関連性は薄く見えるが、その流れで図書館で行っている。

（委員）　図書館が協力されたら良いと思う。目立つ必要は全くないが、関与が見えてこず、行事を後援するイメージに見える。もっとできることはないのかなと思う。例えば、書店開業相談会は、図書館で場所を提供してするとか、連携企画のフェアに関しても、売上や常設販売は別として、何らかの形で関わる方法はないのかなと思った。

（事務局）　「本とのひととき」という商品で、アロマに合う本を選書でご紹介する際、図書館の司書も入り、民間書店の方と一緒に推薦したりしている。図書館としては最終、図書館に来て本を沢山借りる人が増えるのが狙いだ。本屋が増えると、図書館に来る人も増えるだろうと考えている。

（会長）　各委員の意見はあるか。

（委員）　身近に本をというコンセプトは非常によく理解できる。本離れやネットの中のものと対峙していくことが日常的になっている中で、本屋という存在だけを掲げていてもいいのかというと、それも難しいと思う。本をネットの中だけじゃなくて、身体的に直接関わる取り組みをするなら、本だけではなく、例えば若者ならカラオケ屋さんに本があったら読む、カフェに本があったら手に取る、何かと本をコラボさせると、身体を動かしてくれる。単純な本だけではなく、コラボの中に本もある、という形を入れていいのではと思う。

（会長）　実際、図書館とは違うという話もあるが、まちライブラリー等身近なところに本があるという活動は、公共図書館の存在プラスアルファで、さまざまな効果が期待できるのはその通りだ。こういうのを続け、神戸市立図書館の方々が疲弊しない範囲で、さまざまな観点にきっかけを作り広げていくといいと思う。他に意見はあるか。

（委員）　子供へのアプローチはすごくあるが、子供が図書館に来るには、近くの子は来られるが、遠いと来られないので、小中学生の親にもっと本へのアプローチをすると、親が車で連れてくるとか、そういう方向性もあるのではないか。うちは子供が引きこもっていた時期があったが、本に囲まれた部屋で引きこもっており、親が仕事で留守の間は片っ端から本を読んでいた。手の届くところに本がある環境を作るのはすごく大事だ。親へのアプローチも、本のある所へ行くのが常であるというスタートが、人生において大事だ。

（委員）　「本とのひととき」でのグッズ販売について、一見関係ないように思うが、これ結構面白い。梅田の旭屋の話になるが、企画の速さがあり、本に合わせていろんなものが出ており、ある意味本屋に行きたくなる。直接売上に関係するかは不明だが、小さな本屋さんでこういう企画があると、人目について本屋に行

く行動が出る。むしろ子供より大人がそこに行き、買うかどうかは別として、「こんな本がある」と思ったときに、本に対する興味を持つのではと思った。大型書店が好きだったが、横浜の本屋の有隣堂だが、展示の仕方もうまく意外と面白い。そういう意味では、大規模書店より小さめな書店の方が、人を呼んで本への興味を持たせてくれると感じた。

（委員）　まさに本屋は今、紀伊國屋書店が刺さる店舗を作っていたり、個人経営の特別なテーマの書店が売れたりしているので、どんどん連携されると面白い。この活動自体、神戸以外に多くのところでやっておらず、かつ大規模にやっているところは、神戸の大きなメリットだ。ぜひ継続し、皆さまから出た意見も参考に、工夫してさまざまな形で広げていって欲しい。

新垂水図書館だが、来館者が2倍ということだが、予想したより多い数か。

（事務局）　1.5倍位かと予想していたが、多くの来館者となっている。新規登録者数については、新館では座席予約システムを導入したのだが、その予約のために図書館カードが必要であることもあり、増となっている。開館後に複数回視察したが、いつ訪れても賑わっている。

（委員）　新しく座席数が増加すると、読書する人と勉強する人が出てくるが、利用の仕方は想定されていた状況か。

（事務局）　平日の昼間に予想外に来館者が多く、いつ行っても賑わっている状況だ。学習室に対する需要は高く、非常によく利用されている。

（委員）　本を読みたい人が座れないという状況は大丈夫か。

（事務局）　読書用の席を確保した上で、学習専用席を設置している。学習席と図書館の本を利用するための席を明確に分離している。

（委員）　席数は当初60席から4倍以上に増加しており、現状は概ね想定範囲内。綺麗な図書館になり評判が良いと聞いている。

（委員）　新北図書館の天井のデザインは良い感じだが、清掃等費用負担はどうするのか。地下鉄でも、綺麗なデザインだが汚れて改修しているケースがある。埃が溜まりやすい構造部分の維持が気になる。

（委員）　不登校の仕事をしており、情報交換や集まって学習する場所が少ないのだが、新垂水図書館のグループ学習室が役に立ったという話を保護者より聞いた。図書館がグループ学習の場を提供することは今後重要だと思う。場所不足の声が多いので、宣伝をした。

（委員）　部屋が足りないと耳にするので、グループ学習室は様々な使い方ができると思う。新三宮図書館の9・10階とあるがどんな場所か。タワー部分ではなく、下層ホールの最上階の部分か。

（事務局）　図面上の建物の低層階の上の部分に図書館が入る予定。

（事務局）　図書館の横に大きな空中庭園が整備される。庭園を眺めながら読書できる環境となる。

（委員）　かつてはシャワー効果を狙って最上階に図書館を設置した事例はあった。バスターミナルもあり利便性が高いと思う。
事業計画の「図書館サービス充実」のうち、広報・情報発信、障がい者サービス、レファレンス等の充実について、特に力を注ぎたい点は何か。

（事務局）　広報は足りていないとの指摘が多く、SNS（公式 x・インスタグラム等）を活用し、多様な情報発信に努め、ホームページの構成についてもより見やすく改善を進める。

（事務局）　障がい者サービスは読書バリアフリー法に基づき、神戸市関係部局と年 1～2 回協議し、何か連携できないかと考えて実行している。令和 6～7 年度にかけては神戸市立点字図書館と、図書館でのイベントや図書館職員向け研修を連携して実施した。令和 8 年 3 月にも関連イベントを予定しており、具体的な事から少しずつ実績をあげている。図書館にこうしたツールがある・点字図書館がこういうことをしている等の広報が不足している状況なので、来年度以降も連携しながら継続的に進めていきたい。

（委員）　自動化機器・デジタル化の導入は予算的にも厳しいかと思うが新たに導入したものはあるか。

（事務局）　自動化機器については新館整備に合わせて、自動返却機や、予約図書受取棚の導入を進めている。既設の図書館についても自動貸出機・返却機の利用率向上を目指している。

（事務局）　新垂水図書館では自動貸出機の利用を徹底したため動化率が向上し、その分市民サービスに向けることを検討中だ。

（会長）　広報は難題であり、図書館協議会の重要な役割は、協議会の場を通じて図書館の取組を知ることにある。デジタルの広報はしていただくのだが、ただデジタルは取りに行かないと入手できない場合が多いため、回覧板の方が広く届くケースもある。神戸市の中で各種媒体に掲載してもらうなど、ちょっとした機会と従来の方法との併用をしてもらえたら。広報により図書館の存在価値が人々に伝わるので頑張っていただきたい。他に意見はあるか。
事業計画の 5 番の生涯にわたって読書を楽しむ習慣を育てるという「子供の読書推進」は計画の 2 番の「読書推進に取り組む」と重なる部分があるが、5 番目に特記した理由は、特に工夫しているものがあるのか、それとも図書館としての決意の表れなのか。

（事務局）　図書館としての決意も含まれている。

（事務局）　児童館や小学校の放課後の開放図書室等で活動するスタッフ向けの講座を図書館が担い、子供が本に出会える機会を広げる人材育成にも取り組みを進めていきたい。

（会長）　実際に現場で読書推進に関わる方の意見は重要なので、紙の本との出会いも含め、電子両方振興できるよう、計画を広くとってもらえるとよいと思う。

次回は当該分野で新たな進展が報告されることを期待している。神戸市立図書館の活動は色々幅広く行っていることを聞けたと思う。他に意見はあるか。

（委員）　1 点目として、幼少期に本と出会うということは非常に重要だ。幼少期のデジタル使用に関して時間制限などの観点から、一定程度デジタルを推進しつつも、紙媒体の価値もある。共働き家庭が増えており、本を借りに行くこと自体難しい場合がある。経済的格差により買えない･借りに行く時間がない状況で、デジタルの代替的有効性が高い。紙かデジタルかの対立ではなく、家庭背景に即した格差是正と「子供が本を手に取れる体験機会」をどう埋めるかの視点が必要。紙・デジタル双方のメリット・デメリットを検討することが有用。中学校・小学校高学年ではゲーム利用時間が増加しており、幼少期に比べデジタルに親しんでいる。ゲームの代わりに「本を読む」工夫をどうするかが課題だ。

2 点目として、読書支援アプリの広がり（例：英語でも現在位置を表示しながら読むなど）があり、特別支援が必要な方や読みに困難のある方に、その読書支援アプリを用いて識字力・言語能力を高めることは図書館の重要な役割だ。単にデジタル図書を入れるだけでなく、どのソフトやアプリを図書館サービスと組み合わせるのかというアプローチが今後必要だ。

3 点目として、デジタルを含めて「図書」は学び直しの機会になる。学校で十分学べなかった人が、デジタルや紙を併用して学ぶこと、外国籍の方が日本の文献にアクセスできるよう保障することも図書館の役割だ。どの観点から「量・質」に意味を持たせるかを考えるべき。放課後の子供読書の取り組みも踏まえ、児童館や学校の枠組みで読書時間を組み込み、単なる閲覧数（量）ではない「本に出会う機会」を増やす連携を増やすと幅広くなると思う。

（委員）　共働きで図書館に本を借りに行けないという声をよく聞く。デジタル配信もあるので、中学年の子供であれば「青い鳥文庫」を親子で一緒に開いて、母親が短時間 10 分程度読み、興味があれば続きを本人が読む、という方法が効果的だ。忙しい時は、子供が面白かった箇所を親に伝え、親は「じゃあ聞くから、あなた読んでみて」という家庭でのやり取りが行われている。こうした使い方を知らない人が多い。司書が個別に訪問・サービスするのは難しいが、「こういう使い方ができますよ」という便利帳的な利用法を図書館の窓口で周知して貰えたら良いと思う。

（会長）　読書そのものや対象も変わっており、評論・エッセイ・古典などで読み方も異なる。それらをどうサポートするかはやり方が違ってくる。図書館で様々な取り組みを進め、書店とも連携し、青い鳥文庫等を含めた読み放題パック導入は可能性を広げる点で有効なので、この方向性を縮めることなく広げて欲しい、というのが皆様の意見である。

（委員）　1 点目は、街の本屋が減っている件について、自校では流泉書房に紹介いただいた大竹英洋さんを学校に招き、子供たちの前で講演を実施した。街の本屋は

我々にとって情報源であり、イベントを通して本屋が減らない・増える取り組みは嬉しい。
2 点目は、昨年、出版社の厚意で本の寄贈があり、子供達を本屋に連れて行って選書を実施した。その際、6 年生の多くが「本屋に来たことがない」と反応して驚いた。保護者の本への興味が減っているのではないかと感じた。
イベントは本に興味のある家庭の子には有効で、中央図書館はそうした子の心をしっかり掴んで欲しい。一方、関心が全くない家庭の子への働きかけは学校の役割かと感じた。教師の影響力は大きく、教師が読んだ本は子供が手に取りやすい。隙間読書や授業・行事で本をどんどん使い、面白そうだと思うきっかけ作りをする。電子書籍もきっかけに過ぎず、「こんな面白い本がある」と気づくための入口として機能させたい。学校の授業として児童館が運営する取り組みの一環で、本校では図書館で子供が宿題・読書をする『本の広場』を開始した。しゃべる子も宿題する子もいるが、周りに本があるとふっと本を手に取る姿がある。隙間読書や続いて読書・そこに本がある環境を整え、学校でも裾野を広げていきたい。学校にできることがあれば、どんどん提案いただきたい。

（会長）　他の委員の方々は、ご意見あるか。

（委員）　利用者の希望に合わせて書店が本を選ぶサービスがあるが、図書館も司書のセンスや方法を、図書館サービスとして情報発信する価値は高い。テーマ別の選書情報を発信し、知られていない本も含め「こういうテーマでこういう本がある」と伝えることで来館につながると感じた。

（委員）　神戸「本」の文化振興プロジェクトのインスタグラムを見たが、普段本を読まない・離れている層に向けて発信するなら、少しおしゃれすぎる印象で、本好きな人に向いている感じがする。もう少し強いトーンでやる・投稿頻度を増やすなど、普段読まない人に届くアプローチの模索が必要。

（事務局）　行政っぽいと見てもらえない懸念から、おしゃれな見せ方にしている。本の紹介者はフォロワーが多い方を選定している。例えば水族園関係のフォロワーから、本を読まない層が流入する可能性も期待している。実際に本を読まない人へどこまで刺さるかは課題で、検証しながら改善したい。

（委員）　図書館のデザイン（神戸「本」の文化振興プロジェクトのロゴ）がオシャレなので、それをアイコンにして、今週の新刊やイベントを探せるアプリを作るとよいと思う。

（委員）　電子書籍の件は過渡期。今後の方向性は利用状況を見ながら長期スパンで試行錯誤を。うまくいった・いかなかった双方の事例を踏まえ、諦めずに取り組んで欲しい。紙が好きな立場から批判しがちな点はご容赦を。

（会長）　多くの有益な意見をいただいた。参考として反映し今後に活かして欲しい。

【閉会】

（事務局）　長時間の協議ありがとうございました。本日の協議会内容は事務局で議事録を作成し、各委員に確認・承認いただく。次回第 4 回協議会は 7～8 月頃を予定。事務局から日程調整の連絡をするので、ご協力をお願いする。本日の協議会は終了する。皆様ありがとうございました。